両地書

魯迅・許広平
竹内好・松枝茂夫 訳

筑摩叢書 253

筑摩叢書　253

両地書

魯迅・許広平
竹内好・松枝茂夫訳

筑摩書房

竹内　好（たけうち よしみ）
1910年　長野県に生まれる
1977年　死去
著　書　「竹内好評論集」（全三巻）「魯迅」
「新編魯迅雑記」他

松枝茂夫（まつえだ しげお）
1905年　佐賀県に生まれる
中国文学者
訳　書　「紅楼夢」「浮生六記」他

両地書　　筑摩叢書 253

1978年4月25日　初版第1刷発行

訳　者　竹内　好
松枝茂夫
発行者　岡山　猛
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京（291）7651（代表）
振替 東京 6—4123
郵便番号 101—91

©1978 Printed in Japan.

1098—01253—4604　　厚徳社印刷・永興舎製本

序言

この本の編纂のいきさつは、こうである――

一九三二年八月五日、私は霽野（チーイェ）、静農（チンノン）、叢燕（ツンヤー）の三人連署の手紙を受け取った。その手紙には、漱園（スーユアン）（韋素園のこと、李霽野、台静農、韋叢燕らと共に魯迅の指導下に一九二四年「未名社」を組織、ロシア・ソヴェト文学の紹介に努力、のち『莽原』同人にもなる）が八月一日朝五時半、北平（ペーピン）同仁医院（日本同仁会経営の病院）で病死したこと、そこで一同が、彼の遺文を集めて記念の冊子を出すについて、私のところにまだ彼の手紙が保存してあるかどうか問い合せる旨が書いてあった。私は急に、心臓のちぢまるような気がした。というのは、最初のうち私は、おそらく彼の病気は治らぬかもしれぬことをあきらかに知りつつ、なお彼が全快してくれることを望んでいたし、次には、病気が治らぬかもしれぬことをあきらかに知りつつ、時にはそこまで考えを及ぼさぬことがあって、彼からの手紙はことごとく破棄してしまったかもしれないからである。あの枕に伏して、一字一字書いていった手紙を。

私の習慣では、普通の手紙は、返事を出せば破棄してしまうが、もし内容に議論の種があるとか、因縁のある手紙だと、取っておくこともある。そしてそれがたまっていたのを、最近三年間に二回、大焼却を行った。

五年前、国民党の清党（一九二七年の蔣介石による反共クーデター）のころ、私は広東（カントン）で、こういう話をしょっちゅう聴かされた。

それは、甲が捕えられ、甲のところで乙の手紙が発見されたために乙も捕えられ、また乙のところで丙の手紙が発見されたために丙も捕えられ、いずれも行き方が知れぬというのである。むかしは、次から次へ引っかけてゆく「いもづる式」*のやり方があることを、私は知っていたが、それは昔のことばかり思っていた。事実が教訓を垂れてはじめて、今人たるもまた古人たると同様に難いことをハッキリ思い知らされたのである。だが私は、まだ大して気にせずに、放っておいた。一九三〇年、私が「自由大同盟」（国民党のファッショ化に反対する自由防衛の組織）に署名し、浙江省の党部（国民党の地方機関）が中央に「堕落文士魯迅ら」の逮捕を申請するに及んで、私は家を棄てて逃げるに際して、突然興奮して、友人からもらった手紙をことごとく破棄したのである。これは何も「不逞の企み」の痕迹を消さんがためではない。ただ、通信から他人に迷惑をかけるのは、思うに愚のきわみだし、ことに中国のお役所は、だれでも知っているように、一旦かかわりあうと、とんでもないおそろしいところだからである。その後、この関門を突破し、家を移転してからは、また手紙がたまり出し、私はまた放たらかしておいた。しかるに一九三一年一月、意外にも柔石（魯迅に師事した文学者、魯迅の文「忘却のための記念」筑摩書房刊『魯迅文集』〈以下文集と略〉第五巻など参照）が逮捕され、彼のポケットから私の名を書いたものが発見されたので、当局の手が私にまで伸びると噂された。むろんのこと、私はまたも家を棄てて逃げるほかなかった。だがこの時は、興奮の状がいっそう明瞭だったので、まず一切の手紙をことごとく焼却したのは当然であった。

このような二回の事件があったので、北平からの手紙を受け取った途端に、惜しいかなもうないかもしれぬと思った。だがともかく、箱や何かをひっくり返して探してみた。やはり影も形もなかった。友人からの手紙は一通もなかったが、その代りに私たち自身の手紙が出てきた。これは何も、自分たちの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ものをことさら珍重したせいではない。あのときは時間がなかったし、自分の手紙なら累の及ぶのもせいぜい自分だけだから、そのままにしておいたのである。その後、これらの手紙は、さらにまた交叉する銃砲の火線の下（一九三二年一月の上海事変をさす）に二、三十日間も放っておかれたが、一通も失せなかった。その中に多少欠けているところがあるが、これはその当時、自分の不注意から失ったものであって、官災や兵火などに由来するものではない。

もし人が、一生災難にあわなければ、世間は彼を特別の眼で見はしない。だが、監獄に入ったとか、戦場へ出たとなると、たといそれが平凡きわまる人間であろうと、とかく世人は変った眼で彼を見るものである。私たちとこれらの手紙の関係も、まさにそれである。これまで、箱の底積みにして放っておいたものだが、いま改めて、かつて彼があやうく訴訟沙汰になり、あやうく砲火を見舞われかけたことを思うと、いくらか彼が常と様変って見え、いとおしく思えてくるのである。夏の夜は蚊が多く、落着いて字も書けぬので、私たちは、ほぼ年代順にそれを編纂してみた。そして土地別に三集に分け、全体を「両地書」と名づけることにした。

それというのが、この本は、私たち自身にとってこそ、当座の意味があったけれども、他人にはそれがないからである。その中には、死よ生よの熱情もなければ、月よ花よの麗句もない。文章はといえば、私たちは『尺牘精華』も『書信作法』も研究したことはなく、筆まかせに書いただけだから、規則にかなうどころか、大部分が「文章病院」行きの代物である。書いてある内容がまた、学校の騒動、自分の身のまわり、三度の飯の味、天気のよし悪しの範囲を出ない。しかも何よりもよくないことに、私たちは当時、視界を閉ざされた幕の中で暮らしていて、明暗の区別がつかなかった。自分のことを語る場合

はそれでもいいとして、天下の大事を推測するとなると、どうしても阿呆ぶりが正体をあらわす。それゆえ、喜んで浮かれている言辞があっても、今から見ると、そのほとんどは寝言のようなものである。もし、どうあってもこの本の特色を述べ立てろというのであれば、思うに、その平凡さを挙げるほかあるまい。このように平凡なものは、おそらく他人にはあり得まい。たといあっても、保存されていまい。だが、私たちはそうでなかった。これまた、一つの特色といえばいえぬことはなかろう。

しかも、不思議なことに、この本を出版したいという本屋さえあらわれたのである。出版したければ、出版するがよい。例によって、放っておいて一向さし支えない。ただ、そのために読者と相見えることになったについては、誤解をさけるために、ここに二点の断り書きを加えておく必要を感ずる。第一、私は現に「左翼作家聯盟」（一九三〇年に創立された進歩作家の反動防衛のための連合戦線）の一員である。ちかごろの本の広告を見ると、すべて作家は一旦左傾すると、旧作までが飛び上って、その人の赤ん坊のころの泣き声までが革命文学に合致するといった趣きを呈しがちである。だが、私たちのこの本はそうではなく、その中には革命の気分は一切ない。第二、よく人は、手紙こそもっとも粉飾のないもので、当人の真面目をあらわす文章だという。だが私は、そうではない。私はだれに手紙を書くにも、最初はとかくハキハキしたもの言いをせず、口と心が一致しない。この本の中でも、比較的重要な箇所は、後になるまで故意にアイマイな口調で書いたところが随所にある。それというのが、私たちのいる場所は、「現地の長官」、郵便局、校長……等々が、思いのままに手紙を検査できる国柄だからである。だが、無論、ハッキリ言ってあることも少くはない。

もう一つ、手紙に出てくる人名を若干変えてあるが、意図は善悪一様でない。というのは外でもない、

他人が私たちの手紙に名前を出されたのでは、その人に不都合かもしれぬと思ったのと、自分だけのためにも、またぞろ「追って裁判***」などという面倒を避けたかったからである。

この六、七年間を回想するに、私たちをめぐる風波は、少かったとはいえない。絶えざる身もがきの中で、手をさし伸べるものもあれば、石を投げるものもあり、面罵や中傷をあえてするものもあった。だが私たちは、歯を食いしばって、どうやらこの六、七年間を、もがきながら生活してきた。その間に、暗中攻撃を加えた連中はいずれも、漸次さらに暗黒な場所へ自身を没したし、好意の友人の中で二人はこの世にいなくなった。すなわち漱園（スーユアン）と柔石（ロウシー）とである。私たちはこの本をもって、みずからの記念とするとともに、あわせて好意の友人に感謝し、かつは私たちの子に残し与えて、将来、私たちの経てきた真の姿はほぼこのようであったことを知らせたいのである。

一九三二年十二月十六日　　魯迅

* 「いもづる式」――原文「瓜蔓抄」。明の建文帝の遺臣景清（けいせい）が明の成祖を刺そうとして失敗、九族を滅された上、いもづる式にたぐって郷里の人々まで罰された。これを瓜蔓抄というと、明史景清伝に見える。

** 「文章病院」――上海開明書店発行の雑誌『中学生』に連載していた悪文指摘欄。『偽自由書』の『二種類の分かりにくさ』文集第五巻参照。

*** 「追って裁判」――一九二七年五月十一日の漢口の『中央日報』に、魯迅が広東中山大学を辞職したのは、顧頡剛が厦門大学から中山大学に転任してきたので、これと同僚となるのを嫌ったためだという記事が載った。当時杭州に在った顧は七月二十四日、広東なる魯迅に書を寄せ、九月中に広東に帰ってこの事を裁判に訴えるつもりだから、それまで広東を去らずに待っていてもらいたいと書いた。魯迅はこれに対して皮肉な返書をかいてこれを辞わった。『三閑集』に『顧頡剛教授の「裁判を待た」しめらるるを辞す』という一篇がある。

両地書　目次

序言

第一集　北京　一九二五年三月～七月……3

第二集　厦門―広州　一九二六年九月～二七年一月……106

第三集　北平―上海　一九二九年五月～六月……311

『両地書』について……竹内　好……352

筑摩叢書版あとがき……松枝　茂夫……363

両地書（りょうちしょ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一集　北　京

一九二五年三月—七月

一

魯迅先生——

いま先生にお手紙を書いているのは、先生からやがて二年に近い間お教えを受け、毎週「中国小説史略」のお講義を待ちこがれ、先生の授業時間にはいつも我を忘れてぶっきらぼうに、同じハキハキした言葉でもって、好んで発言する一人の学生であります。彼は幾多の懐疑と不平憤懣の言葉を長いあいだ腹にためていたのですが、今は抑えきれなくなったのでしょう、ついに先生に訴えることにしたのです。

ある人にいわせますと、学校の位置は、都会の喧騒と政治的なゴタゴタの影響から隔離されていればいるほど、効果があがるというのです。これには多少の理由があるのでしょうか？　中学時代のことを思い出しますと、あの頃だって教員攻撃や、校長排斥の事件が起らなかったわけではありませんが、正反いずれの側にせよ、もっぱら「人」的な面の権衡に重きをおいていました。「利」的な面から取捨を行ったことは見たことがなかったように思います。先生、これは都会或いは政治的ゴタゴタの影響を受けたのでしょうか、それとも年齢の増加が彼を損なってしまったのでしょうか？　先生、ごらんなさい。今日北京の教育界に校長排斥事件が起ると、ただちに反対者、賛成者が同時にそれぞれ旗幟をかかげます。校長は「留学」とか「留校」——卒業後母校に就職すること——といった立派な位置の提供をエサにするし、学生は利権の得失をもって取捨をなし、今日一人買収し、明日一人買収し……今日一人買収され……明日一人買収され……といったアンバイです。ことに憤慨にたえないのは、こうした沢山の黴菌を含んだ空気が、高等教育を受けていると称する女子学生の間にもみなぎっていることです。女の校

長たるもの、確かに才幹があり、卓見があり、実績があるならば、堂々と公表してもいいわけでしょう。ところが「昏夜に憐れみを乞う」たりして、醜態百出であることは、あまねく人々の耳にし口にしているところであります。しかしこれは環境の種々の関係が彼女を支配して、このようにせざるを得なくさせているのかも知れません。ところでなぜ校内の学生は、この事に対して日に軟化し、今日はちゃんと出席して、反対条件を提出したものが、たちまちそっぽを向いて、唖蟬のように口をつぐんでしまい、或はその変態行動を明示したりするのでしょうか？　情勢は日ましに悪化しています。五・四（一九一九年五月四日、北京大学の学生の示威運動に端を発して全国的な政治行動となった反帝国主義、反封建主義の運動）以後の青年は全く悲観痛哭すべきものになってしまいました！　救いようのない赫々たる気焔の下に、先生、あなたはむろん本の包みを置いて、火の粉のかからぬところに遠く身を引かれる外はなく、そこで「そのまま成仏」がお出来になるでしょう。しかし、先生は首を仰向けて、あの人を酔わせるタバコをぽかりぽかりとくゆらせていらっしゃる時、蟻地獄の中から脱け出そうとしてくるくる舞いをしている人達のことをお考えになったでしょうか？　彼は自ら剛直な人間だと信じています。しかし先生はもっともっと、あくまで剛直なお方だということも彼は信じています。この僅かな共通点のために、彼は先生に対して思うさま直言し、先生が時と場所とに限られず、教え導きを賜りますよう、お願いする次第であります。先生、御承諾下さいますでしょうか？

苦悶の果実は最も嘗め難いものであります。嚼んだ後にいくらか甘味が出てくるにしても、苦い成分が多い場合には、甘い部分は容易に抹殺されます。たとえば苦い茶――薬――を飲んで、さらによく味わいますと、いくらか甘い香りがすることはしますが、苦い茶を好んで飲む興味を起させることはとても出来ません。病気に迫られてでもいない限り、人は故なく苦い茶をわざわざ飲む気には絶対になりま

せん。苦悶から免れることの出来ないのは、病気から免れることの出来ないのと同じかも知れませんが、病気は二六時中、身辺にあるわけではありません――一生病身なのは別として。――ところが苦悶は愛人よりもずっと親密で、二六時中、招かずしてやって来て、追っても去りません。先生、何とかして苦い薬の中に糖分を加え、苦くないようにする方法はないものでしょうか？　そしてまた、糖分があれば絶対に苦くないようになるでしょうか？　先生、章錫琛（チャンシーチェン）先生（上海商務印書館発行『婦女雑誌』の編集者）の『婦女雑誌』での応答のような風にごまかさずに、誠実明白な御指導をお願いできますでしょうか？　右要用のみ申し上げました。御健康を祈ります。

お教えを受けている一学生
許広平（シューコアンピン）　十一、三、十四年

彼は人から学生の二字の上に「女」の一字を加えるべきものと見られています。しかし彼がお嬢さんを気取らないのは、先生がお役人を気取られないのと同じです。彼は実際お嬢さんの身分地位にいる資格がないからです。どうか変にお取りになりませんように。右お笑い草まで。

二

広平（コアンピン）兄――

今日、お手紙を受け取りました。私に答えられない問題もあるかと思いますが、ともかく書いてみましょう――

学校の気風いかんは、政治状態および社会情勢と関連すると思います。もし山林中にあれば、都会に

あるよりはよいはずです。当事者に人を得ればですが。しかし、政治が昏冥では立派な人が当事者になることができないし、学生は学校にいるとき、いやなニュースを耳にすることが少いというだけであって、一旦校門を出て、社会と触れあうようになれば、やはり苦痛も感じましょうし、堕落もしましょう。いくらか早いおそいの差があるだけです。ですから私の考えでは、むしろ都会にあった方が、堕落するものは早く堕落するし、苦痛を感ずるものは早く感じてしまって、よいように思います。そうでないと、静かなところから急ににぎやかなところへ出ると、意外さにびっくりして苦しまねばなりません。そしてその苦痛の総量は、もともと都会にいたものとほとんど変らないのです。

学校の状態は、従前とおなじことです。ただ、十数年前が今よりよかったような気がするというのは、学校経営の資格のあるものがあまり多くなく、したがって競争がそう激しくなかったせいです。今ではそれが多くなり、競争も激しくなったので、下種根性が徹底的に出てきたのです。教育界で高潔などといっているのは、言葉をかざっただけであって、じつは他の何界とも区別ありません。人の性質など、そう容易に改まるものではなく、大学に数年通ったところで大して効果はないのです。ましてその上に、この環境ときています。人体の血液が悪くなれば、からだの一部分だけが健康を保てないと同様、教育界もかかる民国において自分だけ高潔であるわけにはいきません。

ですから、学校が大して高尚でないというのは、じつは来歴が古いのです。しかも金銭の魔力たるや、それ自体非常に大きなものである上に、中国は古来、金銭誘惑術に長けた場所なのです。この現象がうまれるのは当然であります。きけば、今では中学校さえそうなったとか。たまに例外があるが、それは年齢がまだ若くて、経済の困難とか支出の必要を感じていないせいでありましょう。もっとも、それが

女子学校へ伝染するようになったのは、けだし最近のことです。その原因はおそらく、女性が経済的独立の必要を自覚するようになったせいでしょう。経済的独立を獲得しようとすれば、二つの手段によるほかありません。一つは、あくまで争うこと、一つは、うまく立ち廻ることです。前の手段は骨が折れるので、後の手段に転落する。そして眼が覚めかけても、すぐまた昏睡にもどってしまいます。しかし、この状態は、婦人の世界だけがそうなのではなく、男だって大方はそうです。ちがうところといえば、うまく立ち廻るほかに、大ぴらに奪う手段がある点くらいでしょう。

私は実のところ「そのまま成仏」などできません。むやみにタバコをふかすのは、単なる麻酔薬です。煙の中に極楽世界を見たことなどありません。もし私に、青年を指導する力——指導の適否はともかく——が真にありとせば、何も隠したりはしません。残念ながら自分用の磁石さえなく、今でも盲滅法に進んでいるだけなのです。もし深淵に突込んだとしたら、自分は自分としての責任を負いますが、他人を引っぱって行ったのではどうしようもありません。私が演壇上で空論をやりたがらぬのは、このためです。ある小説*で、牧師を攻撃した箇所のあったのを覚えています。一人の田舎の女が、牧師に向って、苦しかった半生の訴えをして助けを求めたところが、牧師は聴きおわると、こう答えたというのです。「耐え忍びなさい。神が生前あなたに苦しみをお与えになったからは、死後にきっと幸福をさずかるでしょうから」と。だが、古今の聖賢をはじめとして、哲人、学者の言うことにしろ、じつはこれより高尚なわけではありません。彼らのいう「将来」なるものは、牧師のいう「死後」と同じではありませんか。私の知っていることも、まったくこれと同様で、私は信じませんが、自分としてほかによい解釈のほどこしようもありません。章錫琛先生の回答だって、アイマイたらざるを得ないというのは、彼自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c